



東九州支部報



韓国山岳会・蔚山支部との交流親睦会 (5月22日・えびの市・ホテル「スパプラザ湯遊」にて)

五月二十二日(土)、午前十時をめぐりに、事前の配車計画のとおりのアリランと坊がつる賛歌の交歓

韓国山岳会蔚山支部と東九州支部との、毎年続いている交流登山会。今年には韓国の友人を迎えて霧島山系を登る予定で、そのスケジュールをハングル文字で書かれたのが、FAXで事務局へ届いた。それによると、五月二十二日～二十四日の行動で、二十二日はえびの市のホテルに泊まり、二十三日は韓国岳から中岳へ縦走。二十四日は高千穂峰を登って皇子原へ下山。その足で別府まで戻って宿泊し、二十五日に帰国するという予定であった。

そのため我々東九州支部の方は、二十二日の夜に蔚山支部が宿泊予約しているえびの市のホテルに合流して、その夜は親善の懇親会、二十三、二十四日に交流登山の予定をたてた。

そうするうちに「宮崎県」に二つの問題が起きた。一つ目は霧島山系の「新燃岳」の火山活動が活発化してきて、五月六日にはレベルⅡへ引き上げられ、半径1km以内は立ち入り禁止となったため、韓国岳から中岳へ通じる縦走路が通れなくなった。二つ目は宮崎県の畜産農家に発生した口蹄疫のため、その対応に追われて、宮崎県は大変な状態になっていて、三つ目の問題が生じた。山登りに欠かせない条件の天気、異常気象の影響が、時ならぬ大雨にみまわれて、当初の予定通りの行動ができなくなったことである。以下、その詳細を報告する。

霧島で風雨にめげずに楽しむ交流 第六回日韓交流登山報告

加藤 英彦

《 も く じ 》	
韓国・蔚山支部との交流会	1
上湯沢・下湯沢	3
新企画ペンリレー	
地下足袋のころ	4
喜寿・傘寿のお祝い	
経塚山	5
本谷山	7
私の無名山ガイドブック	42
九重山・初の遭難の碑	9
50周年実行委員長のお願い	9
お知らせ	9
後記	10



(挨拶する李顧問)

五台の車に分乗して大分を出発してえびの市へ向かった。経路はそれぞれ自由であったので、我々の車はうめりあにて三台合流して延岡経由で西都より東九州自動車道へ入り、宮崎道を通り、えびのICにて下り、えびの市京町温泉の本日の宿「スパプラザ湯遊」へ。昼食休憩を入れて約六時間で到着し、すでに九州道を利用して一足早くついていた別の三台と合流。本日の東九州支部のメンバー十九名が全員そろった。

宿にはわざわざ末永宮崎支部長が差し入れを持って見えられていた。新燃岳の情報をお聞きしたが、やはり通れないとのこと、縦走計画は取りやめざるを得なくなつた。

蔚山支部の到着を待つ間、入浴リラックスタイムである。蔚山支

部員を乗せた貸し切りバスは午後六時に到着。このころより雨足は強くなってきた。予報通りの天気の崩れである。

蔚山組が入浴するのを待つて、午後七時から懇親会を始める。はじめに、甲斐一郎会員の歓迎あいさつ。李顧問のお礼のあいさつ、そして西事務局長の音頭で乾杯。なごやかな宴会は途中から自己紹介の時間となる。最初は蔚山の方から、李顧問が順次参加者をハングルで紹介し、通訳がそれを紹介する。その後、東九州の方は各自が自己紹介し、通訳がそれを訳した。今回はメンバーが一新されておられ、知った顔は李さん、金さん夫婦ぐらいで、若い顔が目につく。二十一名の参加者のうち、七組が夫婦で、一人での参加は七名のみである。しかるに我方は、夫婦での参加は二組のみである。宴が深まると定番の「アリラン」や「坊がつる賛歌」などが出て、午後九時半にはお開きとなった。その夜は、我々は太広間での雑魚寝で、イビキの競演と「蚊」の襲撃に悩まされて熟睡できなかった。

山はだめでも 楽しい交流会

二十三日、目が覚めると外は大風の音である。『大雨、洪水、強風、雷注意報』が出ていたが、やはり！天気予報は当たった。阿南

車は所用のため甲斐会員を乗せて帰っていった、代わりに佐藤(秀)君が一人雨の中を到着。降りしきる雨の中、とりあえず予定どおりにえびの高原まで行って様子をみることにする。

えびの高原までの道のりを車六台とバス一台が連なって上つていく。途中には口いて疫の消毒ポイントがあり、雨の中、作業員がついていて停車させられ、薬を車体に噴霧される。どしや振り道道路が川のようになっているとどこもある。五十分かけてえびの高原につく。高原は、下の盆地よりも激しい雨と風である。とりあえず様子を見るべく、車内やレストハウス内で待機するが、その間にもいつこうに止むどころか、ますます雨風が激しさを増してくる。一時雨の様子をみたが雨足がおさまる気配はなく、小降りになる見通しもないため、バスの中で待っている蔚山の人たちの説明も、彼らも目の前に見る雨風の様子に納得し、あきらめて引き返すことにする。(中島車は所用のため園田会員を乗せて帰っていく。)

えびの市に戻り、スーパー「ブラッセ」で昼の宴会用の食料、ビールなどを買って込んでホテルへ戻る。そして、昼食は雨音を聞きながらミニ宴会となる。韓国組もお国の料理を作って披露している。午後の時間をもてあましながら、入浴したり、しゃべったり、中には囲碁の日韓対決で盛り上がった。

夜は昨夜の続きの宴会である。一通り飲んで、食べて、その後、八時ぐらいからはカラオケタイムとなる。これが意外にも盛り上がり、韓国曲もたくさん入っており、ハングル語と日本語が入り乱れて、日韓両国のカラオケの競演である。韓国の中の一人、非常に芸達者がいて、踊りのおもしろさや、小道具を使つてのパフォーマンスなど、そのコミカルな動きに皆が笑い転げる。彼につられてステージでは皆で踊ったり舞つたりの大賑わいである。この盛り上がりで、思いもよらぬ親睦の場過ぎていった。最後はみんなでお開き。韓国の歌を大合唱し、お開き。本当の交流ができたという気がした夜である。



(交歓会のフィナーレ)

ガスと強風の韓国岳

二十四日は雨は小降りとなつてきた。予定より一時間早く食事を済ませて、七時に出発。昨日の往復時と同じに、口いて疫の消毒ポイントを通つてえびの高原へ。しかし、下界は明るくなりかけていたが、高度を上げていくにつれ天候はガスと小雨と風の中である。八時前に韓国岳登山口につく。小雨が横なぐりに降る中だが登れない天気ではない。雨具をつけて八時二十分に出発する。高度を上げていくほどに風は強くなり、ガスはますます深くなり、小雨はあいかわらず続いている。木立の中を登る時にはさほどないが、吹きさらしになるとものすごい風である。約一時間三〇分の登りで強風と小雨と、ガスで視界ゼロの韓国岳山頂に到着する。

記念写真の撮影をしようにも、風が強すぎて思うように集まれないし、横断幕も出してはみたが、とうてい広げるところではない。それでも韓国組は二人または三人あるいは五人と、少人数に分かれて岩の上の『韓国岳』の標識にのみついて写真を撮つていた。韓国岳でも見えるほど高いので韓国岳と名付けられたとも言われる、名前の由来を聴いている彼らは、晴れていれば母国が見えると期待もあったかもしれないが、このガスと強風ではどうしようもない。山頂はこの天候にもかかわらず、月曜日というのに、ほかの登山者



霧に包まれたえびの高原、お別れ前の全員集合

へ登るとい
うことで、
先を急いで
分かれる）
この悪天
候ではこれ
が精一杯だ
予定してい
た高千穂ノ
峰は韓国岳
より吹きさ
らしで、時
間的にもこ
の悪天候で
は無理で、
あきらめる
ことにして
もらう。そ
こで、ピジ
ターセンタ
ー前の駐車
場でお別れ
セレモニー
だ。恒例に
より、蔚山
組は韓国山
岳会の旗に
めいめいサ
とにする。白鳥山へ登り、白紫池
の周りを回っての約一時間の散策
であったが、白鳥山頂では、あい
かわらず強風の中、韓国岳中腹ま
でガスがとれていて、池やえびの
高原の景色も見渡せてわずかなが
ら霧島山を味わって帰途につく。

翌日二十五日の早朝、韓国組の
宿泊先、別府「富士観ホテル」へ
甲斐会員と見送りに行く。ほんの
気持ちだけではあるが、おみやげ
を全員に渡す。今回我々がいろいろ
なおみやげを頂いたお礼である。
それと、李さんより、来年こちら
から出かけて登りたいと言ってい
る目的の山、智異山（ちりさん・
一九二五m・韓国本土の最高峰で、
一番人気のある山）の地図や資料
を頂いたお礼である。

来年はこちらから韓国を訪問す
る番です。五月の連休を予定して
います。皆さん一緒に韓国本土最
高峰の『智異山』に登りましょう。
それにしても、雨の中、わざわざ
韓国から来て頂いてご苦労様でし
た。今回は韓国岳だけでしたが、
夜のカラオケタイムなど、楽しい
日韓交流ができて本当によかった
です。

霧島の地図の裏面にめいめいがサ
インをして、我々は国土地理院の
インをして、お互いに交換する。
そして、全員で記念写真を撮り、
これから別府へと向かうバスを
『アニョヒカセヨ』と見送る。
そのあとレストランで食事をと
って、中野車の二人はすぐに帰途
へ。加藤車と飯田車の八名は、雨
も止んだので池巡りをして帰るこ
塩川安浩

も次々と来る。昨日の日曜日に予
定していたが登れずに、今日に延
ばした組もいるのだらう。山頂標
識の岩の上は、ごった返し、じっ
としておれないほどの強風に、早
々に下山にかかる。『ほうほうの
ていで』とはこのことか。吹き付
ける風と雨とガスの中、十一時過
ぎに登山口に降りつく。

（渡部車の四人は、高千穂ノ峰

月例山行報告

上湯沢 (1332.5m)
下湯沢 (1084.8m)

(四月月例山行報告)

牧野信江

四月十八日(日) 午前六時、サ
ニーを中野車と岐部車二台で出発。
中野車には別府から飯田さん、そ
の後遠江さんが合流。飯田高原の
吉部から坊ガツルに登るルート
を登る。登山口発七時四五分。

『山といで湯を楽しむ』という
今年度の月例山行のテーマ。最後
の四月は上湯沢、下湯沢と釜ノ口
温泉の予定である。

坊がつるへのルートは、スギ林
の中の緩い登りの道から。その後
突然急なジグザグ登りで、それが
過ぎるとまたほとんど平らな道が
続く。登山口から四五分、飯田さ
んが「もう少し先に暮雨の滝に下
る道がある。この辺から登ろう」と
いうところから右の急斜面にと
りついて登りはじめた。斜面はか
なり急で、用心しながら登るが、
ほとんどヤブがないので助かる。

急斜面をジグザグしながら登っ
ていき、傾斜が緩くなったらまも
なく上湯沢の山頂だ。九時三〇分
山頂到着。カヤの中に四等三角点

があった。

山頂は見晴らしはよくないが木
立が適当にあり、ちよっとした庭
園の趣がある。あちこちにあるミ
ヤマキリシマはまだつぼみが堅い。
南には三俣山、東には谷を挟んで
平治岳の北の稜線が木立の向こう
に見える。



(上湯沢にて)

このあとの下湯沢までは、稜線を
たどっても行けるが、かなりヤブ
が予想されるので、いったん来た
道を下って、下から登る方が『楽
道である』うと、楽な道を選ぶ。

往路をそのまま下山し、一一時
に吉部の登山口に到着。このあ
と、次の下湯沢へ急ぐ。昼が近い
が、先に目標を攻略してしまおう
との作戦だ。
三俣山から北にせり出した稜線
の山裾、吉部の平地と山との際を

地下足袋のころ

梅木秀徳

登山を始めたのは昭和二四年(一九四九年)高校一年生で山岳部に入ってからだ。終戦後ほどなく、世相は混乱していたし、食糧をはじめ物資は不足していたが、平和になたのを待っていたかのように登山界は復活していた。

九重登山口の豊後中村駅の近くに住んでいたので、登山する人たちの装備は戦前のものをそのまま使っていたのが分かる。しかし、新しく登山を始める者たちにとっては、装備らしきものはまるでなかった。

夏山の服装はともかく、ザックも靴もない。食糧の買い出し用のザックを父母から借り、靴は農作業用の地下足袋を履いた。飯田高原を歩いている時はよかったが、諏城守越のガレ場は辛かった。足の裏が痛くなるが、若さがカバーしてくれた。

地下足袋の好ましい点は、足によくフィットし、自由がきくところだろう。ちよつとした岩場もこなせた。九重山群や日田周辺、さらに珍珠のメサの山々を登り回るには不自由はない。ただ、荷物が重くなると少々こたえた。祖母・傾をこれで縦走した際には、スズタケの切り株の尖りも怖かった。

ごく最近、NHKの番組「ためしてガッテン」で登山術が取り上げられた。これまでの経験から、もっともだと感じるところが多かったが、その中に地下足袋の効用が紹介された。東北のマガギが愛用しており、足裏で自然を感じるといふ点は十分に納得ができた。

私にとって地下足袋の体験は二年あまりで、その後は放出された軍靴を手に入れた。鉄を打ちなおしてもらうことに始まり、クリンカー、ムガー、さらにトリコニーなどの名前も覚えた。これで随分と大人になった気がしたものだ。ただ、日田駅の地下道の階段はよく滑った。

本格的な登山靴は、大学入学の入学記念に父母が金を出してくれてタカハシに注文した。自分で採寸して、特注するのが普通だった。それまで父母は私の登山にどちらかといえは反対だったが、靴を買ってくれたことは、認められた証左だったとも言えるだろう。そのタカハシも在学半ばで踏み破ってしまった。以後はゴム底へと私の靴遍歴は続く。何足履き潰しただろうか。今でも、未だ足を入れていない新品の革靴一足が用具箱の片隅にある。しかし、我が家に地下足袋の姿はない。

地下足袋の思い出は、さまざま当時の用具に結びついてくる。高校山岳部のテントは軍隊が使っていたもので、四人で一枚ずつハト目のついた防水布を持ち、それを継ぎ合わせた。支柱も二本繋ぎで、四人が一本ずつザックに括りつけた。寝袋は毛布を状袋にしたもの、ヤッケも帆布で母が手縫いしてくれたものだ。

高齢となって、最近は一九八のスニーカーまがい履くことが多くなったが、ひとつ、ズックでも履いて草原を歩いてみようか。リレー随筆とはいえ、内容はリレーするわけではない。次回は首藤宏史さんが自由に書いてください。

※ 支部報発刊五〇号を記念して新たなシリーズものとしてはじめました。初回は梅木支部長に執筆と次回執筆者の指名をお願いします。今後は指名された人が執筆し、次回執筆者を指名のうえ、原稿を発行月(一、四、七、一〇月)の始めまでに編集局へ送るようになさってください。随筆リレーのかたちをとりますが、内容・形態等は執筆者にお任せします。アラバスクの模様のように、いろんな形で何処までも続くペンリレーの始まりです。



(天ぷら・シシ鍋パーティ)

回り込んで、北西の際にある林道の入り口から下湯沢をめざして登りはじめた。最初からスギ林の中の急斜面である。ヤブはないがスギの落ち葉の多い、クッションのよい斜面を斜めに登っていく。登り口から約三〇分で平坦な台地に着いた。薄暗いスギの林の中、木立の中の小さな広場に三等三角点があった。展望は全くなく、スギに囲まれて薄暗い。写真だけ撮ってすぐに下山。登り三〇分。下りは一五分で車のところに着いた。

今日のメインは山登りよりもこのあとの『天ぷらとシシ鍋会』にあったのだ。そのため、上湯沢の急斜面を下るときには、たくさんあったモミジガサを採って下った。タラの芽やハリギリ、ヨモギやハナイカダなどと採りながら下った。4

下湯沢から下山後はその会場探

し・・・。長者原の駐車場横にある園地の東屋でやるうと行ってみたが、そこには調理などは禁止の立て札がある。仕方なしに引き返して、吉部にある道路脇にある貨車の横の空き地を借りることにした。

最初は天ぷらで、山で皆さんが摘んだ山菜の揚げたてをいただく。遠江さんの手際がよい。揚げたての天ぷらは本当に美味しい。材料が足りなくなると、男性たちが近くに生えているヨモギやタンポポなどを採ってきて材料にする。

次にはシシ鍋が始まる。石川さんがいつものシシ肉持参だ。鍋の時にはいつも遠江さんが鍋や野菜などの食材を準備してくれていてありがたい。みんな美味しいので何度もおかわりを出す。おなかがいっぱいになったところで今日はここで、流れ解散となった。予定は釜ノ口温泉だったが、車二台はそれぞれ勝手に好きなところの温泉へ。私たちは湯布院を過ぎたところにある、道の駅の小型版のようなどころにある「かわにし温泉」に入った。

参加者：西、飯田、石川、久保、岐部、遠江、中野、牧野

傘寿・喜寿の御

祝い登山

経塚山 (612m)

(六月月例山行報告)

下川 幸一

今年喜寿を迎える梅木秀徳支部長と傘寿を迎え益々元気な星子貞夫会員、お二人を囲んでの特別な月例山行である。

平成二二年度定例総会で、今年度の月例山行が「九州の源流の峰に登ろう」というテーマに決定し、月々の山行の具体的実行計画をたててリードする担当者が役員会で決められた。六月のこの記念すべき御祝い登山は、八坂川の源流の峰、ミヤマキリシマ咲き誇る経塚山となり、地元の興田勝幸会員が担当責任者として当日の山行をリードしていただいた。

大分から日出町に向かうとき、東西に連なる山並みが見える。これが鹿鳴越連山である。主なピークは左(西)から山頂に電波塔のある経塚山、最高峰の七つ石山、板川山、城山、百合野山である。本日の御祝い登山は「ザビエルが通った道」として整備された豊岡↓山田湧水↓西鹿鳴越↓経塚山のコースが設定されている。

六月五日(土) 七時四九分大分駅発の電車で、本日の集合・出発場所の豊後豊岡駅に向かう。大分駅から六名、別府駅から二名合流の八名のメンバーである。八時一〇分に到着すると、駅前の広場にはもう興田さんを中心にたくさんのメンバーが集まっている。我々を含めて豊後豊岡組は二〇名である。

軽い準備体操をし、予定より一〇分早い八時二〇分に出発。興田さんを先頭に豊嶺会の皆さんが中心になって豊岡の町並みを進む。豊岡小学校横を左折し、小学校の西側から裏手に回る舗装された車道を行き、山に向かって真っ直ぐに登っていく。

本日は快晴で、真夏日のように日差しが強く、特に舗装道路からの照り返しもあり、皆汗びっしょりかいている。先頭グループがかなり早いペースで進んでおり、集団がばらけてきた。途中でマイカー用に「経塚山へ」の標識が何箇所も見られる。

やがて、速見地区広域農道と交差し、宮川の右岸を谷間に入っていくと、高速道路の下を通り過ぎて山田の集落に着く。断層崖の下には名水で有名な山田湧水があり、先行グループ四人が手を振って迎えてくれた。豊後豊岡駅をスタートして二五分で到着。さっそく冷たい湧水を

れる。一〇分の休憩で後続グループも全員揃い出発する。高速道路に向かって右側のコンクリート道に入り、すぐ三叉路を右に進む。やがて未舗装の作業道になり、続いて沢沿いの小径にか



傘寿と喜寿のお祝い (経塚山山頂にて)

わっていく。山田湧水から約一五分で「一目城石切場跡」を通る。ここは日出城を築いた石を採った場所である。自然林に囲まれた中を進むと、暑い日差しも遮られ、また登山路もよく整備されており、歩き易い。

まもなく殿様籠置場があり、付近には石積が点在している。谷間から小さな尾根に上がり、石切場跡から三〇分程進んだところに、別府湾を一望のもとに眺められる展望ポイントがあり、ここで一同小休止。

ここから四辻はもうすぐだ。山腹を少し巻いて一〇分後に「西の峠」に出た。右は「七つ石山」、左は「経塚山」、直進は広域農道である。この付近が西鹿鳴越だ。

昔はここから直接経塚山へカヤの中を直登していたが、今はその道もない。広域農道を経て左折し、中継塔を目指す。すぐに西側の塔からならかな道が山頂に続いており、一〇時一五分に本日の目的地の経塚山に到着。豊後豊岡駅を出発してちょうど二時間である。

山頂では六人の先着組が我々を迎えてくれた。山頂は三六〇度の大パノラマの眺望で、海と山が織りなす素晴らしい景観に皆歓声をあげている。お二人の長寿を祝うかのように、雲一点もない青空の下、ピンクのミヤマキリシマが色どりを添えている。

七つ石に登った久保さん、石川さん等の到着を待って、全員が揃った一〇時二〇分に盛大な長寿御

祝いのセレモニーが始まった。総勢約三〇名の山仲間が駆け付け、山頂は一段と盛り上がりつつある。加藤英彦会長が全員にシャンパンを注ぎ、事務局長の西孝子さんがお二人の長寿の御祝いに声高らかに乾杯の音頭をとり、一気に御祝いモードが高まる。

本日の山行リーダーである興田会員が司会・進行を務め、まず梅木さん、星子さんのお二人を囲んで全員の記念撮影をする。続いて、本日の参加者全員が自己紹介とお二人との関係、御祝いの言葉をお二人の言葉とこれまでの山歴の披露があり、改めてお二人の山への思い入れの深さに驚かされるばかりであった。

以下、お二人の挨拶を紹介する。はじめに傘寿御祝いの星子貞夫さんが挨拶。

「自分は大学時代から山に登り始め、以降ずっと山に登り続け、山のことしか知らない程です。世界七大陸の最高峰のうち、五大大陸は登破したが、エベレストと南極大陸のビンソンマシフの2つが未登である。自分の歴史は50年の記念誌に書いているので読んで下さり続けたい」と述べられた。

続いて、喜寿御祝いの梅木秀徳支部長が挨拶。

ここに居る加藤英彦さんのお父さん、加藤敦功さんに最初の指導を受けました。最初の海外遠征は台湾でしたが、昭和四〇年にはヒンドウクシュ・コイモンディの隊



(梅木(右)・星子(左)両会員)

長として加藤英彦さんと一緒に遠征した。また高校時代山岳部、九州大学一年の時、法華院のあせび小屋で「坊がつる賛歌」を仲間とつくる。もう山には登れなくなりましたが、山に関わりながらこれからの人生を大事にしたい」と述べられた。

お二人への記念として、経塚山の3600分の1の地図に参加者全員のサインを入れ、加藤英彦さんより贈呈された。

最後に、県山岳連盟の赤嶺和樹さんの音頭で万歳三唱。御祝い登山の締めをし、山頂で解散し各グループ毎に分かれての昼食となる。やや早い一〇時三〇分からは快晴の青空の下、ピンクの咲きほこるミヤマキリシマに囲まれての楽しい昼食である。

この後、我々五名(星子・加藤・渡部・下川幸一・智子)は鹿鳴越連山縦走を計画しており、経塚山を一二時にスタートする。中継塔から道なき道の背丈以上のカヤの斜面をかき分けながら、やっと林道に飛び出し、西の峠から左側の松林の小径を登る。なんと最年長の星子さんが先頭に立って一気に山頂へ進む。

一二時四五分に「七つ石山」山頂着。山頂には数個の大きな石があり、別府湾の眺望は素晴らしい。南に鶴見山系、東北東に板川山方向の山々が見渡せ、最高の気分になる。

一〇分の休憩の後、板川山へ

向けてスタートする。やさしい尾根歩きが続く、樹林の中にひっそりと立つ標識の板川山に到着。ここから急な下りが続き、さらに植林地を登る。道は荒れており、城山山頂へは途中で分かれ道があり、ピストンで往復する。城山は主尾根からちよつと外れており、杉や雑木に囲まれて周囲の山々は望めない。一三時三〇分に「城山」山頂着。

主尾根に戻って、このあと急降下で「東の峠」へ到着。この付近が東鹿鳴越道になる。百合野山へは、登山口を左折するが道はかなり荒れている。途中何ヶ所も林道開発のため山自体が壊され、登山道も寸断されてわかりにくく、かなり足元が悪く疲れる登りとなる。一四時二〇分「百合野山」山頂着。山頂には三角点の標石と標柱があり、五人全員で記念撮影。

周囲は雑木に囲まれて視界は不良。一〇分の休憩の後、下山開始。一気に登山口まで下り、殿様道を沢に沿って南に下り続ける。この道は今あまり通らないせいか、足元が見えないほど雑草に覆われて荒れていた。四〇分間で、百合野山から殿様道登山口まで一気に下り、小休止の後、本日スタートの豊後豊岡駅まで舗装道路を下って行く。相変わらず日差しが強く暑い。

一五時四〇分、豊後豊岡駅に到着し、その後別府駅前の高等温泉で疲れを癒し、おいしい生ビールで乾杯。一七時五〇分に無事大

分駅に到着。

本日の登山は、快晴の登山日和の中、大勢の山仲間が集いすばらしい御祝いの登山となった。また、鹿鳴越縦走登山も初めて体験し、歴史や文化を学ぶ充実した一日となった。

本谷山 (1642.9m)

(七月月例山行報告)

久保洋一

- 【参加者 29名】
- 東九州支部会員：梅木、星子、西、興田(勝幸)、大林、加藤、飯田、安藤(幹)、管、中野、久保、下川(幸一)、下川(智子)、石神
- 東九州支部会友：渡部、安藤(セツ)、土居、石川、長野、遠江、今山、宮本
- 県山岳連盟：赤嶺
- 豊嶺会：谷、佐藤
- 森、井上、興田(勝)

七月は大野川、五ヶ瀬川の源流の峰となる本谷山である。朝三時頃の雷と大雨で今日の山登りはどうなるのかな？と感ずて五時の出発時刻には雨雲はひろがっているもの雨は一応上がっている。

五時一〇分前にサニー前に到着。もうすでに外は明るい。西さんが店の前に出て立っていた。五分もすると中野さんや本日のリーダー下川さんも夫婦で到着。まだ本日の参加予定者で着いてない人がいるらしくしばらく待ったが現れないので出発。

尾平越トンネルを抜けたところにある駐車場に集合することを確認して。途中の道路は夜中の雨で濡れている。梅雨の最中に雨に遭わないだけましな方かも知れない。しっとりして紫陽花の似合う景色だ。

道を間違えて七時一〇分頃だったか、やっと待ち合わせの駐車場に着いた。中野さんや下川さんはもう先に到着していた。先着組は登山靴を履いたり雨ガッパを着たり出発の準備をしている。私たちもあわてて準備をした。

全員で九名だ。こんな天気にしてはまずまずの集まりである。出発前に本日のリーダー下川さんの挨拶があり、簡単なストレッチをして七時三三分に出発。

本谷山に登るにはトンネルの上の尾根に、駐車場の横から直登するルートと駐車場から見えた道路の反対側にある本谷山登山口から本谷方向に斜めに尾根に上がるルートがある。しかし後のルートは未踏の為、登山道の状況が判らず下川さんは少しためらっていて、最初は自分が登ったことのある直登コースを考えていて、そのように私にも話していたが、トツプを石川さんに指名したので思惑とは違うことになった。

我等が石川さんは何の頓着も無くさっさと本谷山登山口の方に歩いて行ってしまった。皆、後に続いて後に行った。私自身は前回五月の山登りで加藤さんとこの登り口と尾根への取り付き地点を確認していたのでこのコースの方がいいと思っただが、そこはリーダーの判断だ。

まあ、下川さんも納得したのだろう。登り始めたが激しい雨の後にもかかわらず、踏み跡はしっかりとれている。ちよつとした水の流れがありその流れに沿って登っていく。本谷山の方へ向かって斜面を斜めに徐々に登っている。周りには人工林で少し薄暗い。こんな林の中では小鳥のさえずりさえ聞こえない。景色も見えず雰囲気も

味気ない限りだ。石川さんのペースが速いのか西さんとの間隔が少しずつ開いていく。気を使って石川さんが時々足を止める。二、三度足を止めたあたりで遠江さんが暑くなったとカッパを脱ぐ。雨は降っていない。いつ降りだしてもおかしくないよ。うな雲行きではあるが。同じような登りを続けて行く。四五分ほどで前方が明るくなった。しかも自然林でとてもいい雰囲気だ。尾根に着いたようだ。このあたりはテント泊をしたものがマナーをわきまえなかったのかゴミが散乱している。がっかりだ。

尾根に着いたところで小休止。八時一五分。さらに七、八分も進むと水場に着く。この到着時間を考えるとこのコースが正解だったように思う。ここもゴミが散見する。

祖母くんの縦走路の歴史の古さや鉾山の歴史等を勘案してもこの山路のゴミは他ではあまり類を見ないくらいひどいものだ。やっぱ何とかなさなくてはいいけない。宮崎支部と協力して清掃計画をしてはどうだろう。

水場でまた小休止。私は水を飲みながら水場まで降りていった。一分もかからない。前回、加藤さんと祖母からここまで来たのがつい先日のことだ。遠江さんはここで、大きくらげを見つけた。かなりの量がある。

さて、先を急ごう。後はそれほど大きなアツプダウンはなく、ただだらだらと登っていく。一四四〇mの高台に九時三〇分着。ここでまた小休止。九時四〇分に出発して三國岩までさらに登っていく。途中で雨が本降りになりカッパを着用。三國岩で皆ザックを置いて本谷山山頂へ。山頂着一〇時二五分。出発してから約三時間は登山マップのコースタイムとほぼ同じ。一〇時三五分下山開始。

一〇時四五分三國岩着。ここで遠江さんが用意してくれていたソーメンを皆で美味しくいただいた。小雨まじりのミステイな雰囲気の中でいたただく喉越し爽やかなソーメンはまた格別だった。遠江さんありがたうございました。



(本谷山山頂にて)

一〇時三〇分三國岩着。下りになるとまた一段とペースが上がり、どんどん降りていく。一二時二〇

分頃、雨が上がったので皆カッパを脱ぐ。そして楽しい会話で盛り上がりながらどんどん下っていく。

一二時三五分ブナ広場(水場)着。一二時五〇分尾根分岐点着。

皆、西さんが車で待っているのを気にしてかさらにどんどん下る。

一三時三五分尾平越登山口着。全行程五時間の山登りであった。帰りに竹田でお風呂に入って解散。以上七月の月例山行報告でした。

参加者：西、中野、下川(幸)、(智)、久保、石川、遠江、岐部、藤原

「赤岳」(359.1m)

前回紹介した鳶山と椎ヶ谷を隔てて東に対峙する峰で、山腹はほとんど人工林であるが、山頂付近はけっこう風情がある。

県道三重弥生線の西谷ロバス停から北に、谷沿いに登る細い車道を行くと、約2kmで椎ヶ谷の集落に着く。この、谷間に数軒の民家が点在する集落は一〇年ぐらい前までは人々が暮らしていたが、今は人影もなく、家々は生活の気配すらなくひっそりとして、全くの廃村状態である。

集落入り口の直すぐ下に大きなカーブの少し手前に、右に分岐して谷を渡って上る林道がある。細い荒れた小さな林道で、この曲がりくねった小道を登っていく。はじめは林道らしくやや幅もあり、車の轍もあるが、登りはじめて二〇分(六〇〇m)ほどで稜線上に出て、そこから細い作業道となる。小型RV車ならここまで上ってこれよう。山腹を巻くように登っていくと、入り口から約五〇分(一・五km)で、作業道の終点に至る。その終点の200mほど手前の右に急カーブした地点より前方(東)の稜線鞍部をめざして登る。作業道からスギ林を直登していけば五分ほどで稜線鞍部に着く。

椿山から南東に派生する稜線が高度を下げて、四〇〇mを割る地点で東西に分派するが、この鞍部

はその稜線分派の西の稜線の始まりである。鞍部から右へわずかに登ると広い鈍頂に達し、ここから稜線がまた二つに分かれている。南西に三〇〇mほど行ったところに灌木がまばらな鈍頂があり、そこから急傾斜で高度を下っている。三角点は先ほどの稜線分岐から南東に四〇〇mほど行ったやや低いところにある。この稜線分派地点は疎林の囲まれて、稜線を分けるのは中の浅い谷で、地形が読みづらいので注意を要する。

しかし、この浅い谷は緩い窪地状で、落葉樹の灌木林が広がり、深山の風情を思わせるものがある。南東に稜線を緩く下っていくと南(右)にスギ林があらわれるが、北(左)の急斜面は鬱蒼とした照葉樹の林がずっと下の方へ広がっている。稜線上にはヤマザクラの

大木が幾本もあり、中には樹齢一〇〇年を越えると思われる古木も見られる。鈍頂から一〇分たらずでモチ、ヤブニッケイ、ヒシヤカキ、ソヨゴなどの木立に囲まれた小広場の中の三角点に至る。そこは稜線の突端で、その向こうは崖状に切れ落ちて、彼方に佐伯湾の景色が開ける。

- ・参考タイム：椎ヶ谷↓40分
- ↓稜線へのとりつき↓20分
- ↓赤岳三角点
- ・地形図：25, 000分の1：植松

(赤岳)



「門田」(382.5m)

「かんだ」と点の記の読み方には出ている。番匠川の湾曲と、久留須川、堤内川とに挟まれた、小さな四角形の山塊は佐間ヶ岳を主峰とする。その東端にあたる部分の小ピークがこの点である。北は谷間で、東は水田、南は国道と堤内川などと三方が低く、国道一〇号に沿って南西に長く延びる稜線が背後に連なっている。稜線の北側斜面はスギ林であるが、南斜面は濃い照葉樹林で、三角点のまわりは西側を除き、シイ、カシ、ツバキ、ハゼなどの自然林である。

佐伯市旧弥生町の切畑小学校の校庭の南にある小高い丘の上である。ここに登るには学校の校庭から、道路を挟んで反対側のコンクリート吹きつけの崖の端がよい。その崖の北の端の民家の脇から稜線にとりつく。アラカシの多い

- ・参考タイム：切畑小学校校庭脇↓15分
- ↓門田三角点
- ・地形図：25, 000分の1：植松



- ・地形図：25, 000分の1：植松

里山の稜線歩き

(その13)

今回も佐伯市郊外の里山の稜線歩きルートを紹介しよう。

飯田 勝之

私の無名山ガイドブック42

九重山

初の遭難事故より八〇年

昭和五年八月一日、久住高原の展望台より本山ルートに登った二人に若い登山者（広崎秀雄、渡辺邦彦）が折からの台風接近で暴風雨の中、疲れと寒さで力つき、久住山御池の石室近くで遭難死した。翌年、現場近くに遭難碑が建てられた。これは今から八〇年前の出来事である。

その遭難碑は、昭和三〇年代に一度修復されているが、その後長い期間風雨にさらされてきて、地盤の風化等のため近年再び倒れてしまっていた。そのためこれを修復する作業が行われ、このたび完成した。

今年が丁度八〇年目となる節目の年である。そこで、この節目の年に慰霊の供養登山をして、二人の冥福を祈るとともに、山での遭難ということをあらためて自覚し、自ら警鐘を鳴らす機会としたい。

慰霊登山は八月八日（日）とし、午前十一時に現地（久住山・御池）集合としたい。支部員はもとより、山の関係者や知人友人にも参加を呼びかけて頂きたい。詳細については別途お知らせすることとしたいが、趣旨をご理解いただき、なるべくたくさんの方々の参加をお願いしたい。この行事のこ

とについては加藤（097-543-0333）まで



（転倒した遭難碑・二二年六月二〇日撮影）

※ 八月の月例山行は八月八日、英彦山の予定でしたが、予定を変更してこの慰霊登山を月例山行とします。現地が分からない人もい

目前に近づいた五〇周年記念行事

十一月に予定している支部創立五〇周年記念行事も、いよいよ目前に近づいてきました。記念の行事として会員・会友の全員の力の結集で盛会のうちに終わらせたいものです。そしてその成功を郷土の登山文化の発展に繋げることが五〇周年行事を実施する意義につながるものと思います。実行委員会は、全ての行事に皆さんの完全参加を期待していますが、所用でどうしても都合がつかない方もあろうと思いますが、後日皆さんに、各行事ごとの参加・出欠予定を採らせていただきますので、あらかじめ予定を決めておいてください。

- 参加・出欠を採る予定の行事
- ①記念式典 十一月六日（土） 十四時～十四時三十分
 - ②記念講演会 十一月六日（土） 十四時三十分～十七時
 - ③記念祝賀会 十一月六日（土） 十八時～二十時
 - ④記念山行 十一月七日（日） 鶴見岳

五十周年記念事業実行委員会
委員長 梅木秀徳

お知らせ

八月月例山行のご案内

- ・月 日：八月八日（日）
- ・目的地：久住山・慰霊碑
- ・出 発：八月八日（日）
- 午前六時サニ一出発
- 午前八時牧ノ戸峠集合

九月月例山行のご案内

- ・月 日：九月二日（日）
- ・目的地：国見山（熊本県・宮崎県、耳川、球磨川、緑川の源流の峰）
- ・出 発：九月二日（日）
- 午前三時三十分サニ一出発
- 4:30(サニ一発) ↓ 5:00(葉木登山口着) ↓ 5:15(葉木登山口着) ↓ 9:00(平家山着) ↓ 9:10(平家山発) ↓ 11:30(広河原分岐着) ↓ 12:05(国見岳着) ↓ 12:35(国見岳発) ↓ 14:40(平家山) ↓ 15:40(葉木登山口) ↓ 20:00(大分着)

一〇月月例山行のご案内

- ・月 日：一〇月一七日（日）、
- ・目的地：両子山 (280.5m) (安岐川、田深川、伊美川の源流の峰)
- ・出 発：一〇月一七日
- 午前七時サニ一出発。

一二月月例山行のご案内

- ・月 日：十一月七日（日）
- ・目的地：鶴見岳 (374.5m) (大分川の源流部)
- ・出 発：十一月七日（日）
- 午前八時大分駅前出発

※ 五〇周年記念行事の記念山行

五〇周年記念海外遠征登山隊員の募集

参加締め切りは七月三十一日まででしたが、八月二〇日まで延期してあります。四月の支部報と同封でお送りした申込書で申し込んで下さい。別に申込書が必要な場合は事務局にあります。

支部役員会と五〇周年実行委員会の開催

支部役員および五〇周年記念事業実行委員の主、副担当者はお集まり下さい

・日時 八月一八日(水)
午後六時から

・場所 大分市府内町
「コンパルホール」
・実行委員(主・副担当者)
記念講演会(梅木)
記念式典(宇津宮)
記念祝賀会(加藤)

ここは何処?



・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?

・お分かりの方は事務局まで、けがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで、正解多数の場合は抽選します。)
・締め切り五
月末日

前回の正解は
鹿納山の頂上から
大崩山、桑原山、
木山内岳などを撮
りました。

全国支部懇談会

主催 多摩支部
期日 九月五日(日)

六日(月)

会場 京王プラザホテル多摩
(多摩市落合一四三)

記念山行 高尾山
費用 一九、〇〇〇円(宿泊、懇親会、記念山行)
申込期日 七月三十一日

申込・問い合わせ 多摩支部事務局

(tel・fax 042-537-3457
E-mail tm@jac.or.jp)

事務局連絡先の一時変更

五〇周年記念行事が間近になる、一〇月始めから一〇月末まで(西事務局長不在のため)事務局

資料展示会(佐藤浩・中野)
記念山行(国内)(野村、緒方)
記念山行(海外)(甲斐(良)・星子)
記念誌作成(安東・久保)
参加記念品(甲斐(一))
記録(首藤)
総務(安藤(幹)・飯田)
事務局(西・阿南)

の連絡先は加藤委員宅とします
電話 097-543-0333
携帯 090-3607-7903

※事務局より
本部会費、支部会費未納の方は
は早急に納入して下さい。

後記

一月、四月、七月、一〇月の年四回の季刊発行が続いている。創刊五〇号の記念企画としてはじめた『ペンリレー』、おもしろく盛り上がりつつ欲しいものです。
○今のうちに書きたいとおっしゃる方は、次回指名者に申し出るのも手ですね。
○五〇周年記念もだんだん近づいてきました。本番に向けて、支部員の力の結集を見せたいものです。
(K・I)

日本山岳会東九州支部報 50号

2010年(平成22年)7月25日(日)
発行者 梅木 秀徳
編集者 飯田 勝之
発行所 〒870-0021
大分市府内町1-3-20
サニースポーツ内 西 孝子方
TEL・FAX 097-532-0926
題字 (故)佐藤正八